

2006年ジャパ・ベトナムのツアーに参加して

小野 浩美

7月27日（木）成田から台北経由でホーチミン市へ

9時40分成田空港発、台北経由で16時20分にホーチミンに着いた。この日はホテルに着いてから、ボランティアで通訳してくださる方々に集ってもらい、打ち合わせを行った。

7月28日（金）ビンフック省ロンディエン、山岳民族子どもの寮訪問

朝6時にホテルを出発し、最初の訪問地ロンディエンに向かった。去年道路工事をしてきた所はすっかりきれいになり走りやすくなったが、その分料金所が増えていた。途中朝食をとり、10時半頃、目的の山岳民族の寮に着いた。毎年恒例になった歓迎会が開かれ、子どもたちが歌や踊りを披露してくれた。「母を想う歌」を一生懸命歌ってくれた16歳くらいの少女は、ここに来て学校に通い、初めて字が書けるようになったという。歓迎会のあと、寮からバイクで20分、さらに徒歩で15分離れた山岳民族の集落に案内された。カヤと竹で作られた家は、土間にベットがあるだけで、電気はきていない。以前は川の水を使っていたが、今は井戸を掘って飲料水にしているという。ここに26家族が住んでいるが、学校に通えない子どもが30人以上いて、寮のシスターが字を教えに週3回通っている。他にこの集落を訪れる人もほとんどいないためだろうか、家にいた大人も、木陰で遊んでいた子どもたちも、いきなり現れた私たちを不思議そうに見つめた。いろいろな意味で、社会から隔絶された地域という感じを受けた。2時半頃ロンディエンを出て6時半ホテルに戻った。

7月29日（土）ホーチミン市、スラムの見学、スタッフとの交流

朝9時集合、それぞれが分かれてスタッフのバイクに乗り、スラム地区の見学とHIV陽性者との交流を行った。私が訪れたスラムでは、お母さん達が4つのグループに分かれ、それぞれ自慢の料理をつくる料理コンテストたけなわだった。これはスラムの婦人達の地域活動として行っている。私にそれぞれの料理を食べて品評し1位を決めてほしいと言われたが、どれも美味しくとても困った。その後みんなで一緒に料理を食べ、お母さん達と、ここでの生活、仕事や家族のこと、日本での生活のことなど雑談した。日本で、ここよりも収入は多いが物価も高く生活は楽ではないと話す、「それでもお金を貯めてベトナムに来られるでしょ」と言われてしまった。

午後は事務所に集まり、4人のスタッフと交流会を持った。最初に活動内容について説明を受けた。5つのスラム地区で、女性に対して事業資金の貸し出し、子どもに対して教育、青年には医療活動、HIV陽性者には助け合いの促進を、分担して当たっているとのことだ。日本側から「活動してくる中で、うまく進まずがっかりすることも多いと思うが、どのようにやる気を保っているのですか」という質問があった。4人のスタッフそれぞれから、具体的で率直な答えが返ってきた。麻薬使用者は気が荒く、子どもたちも外では反抗的だが、こちらに来るとよく言うことを聞いてくれ、励まされることがあるそうだ。彼らの本音を聞くことができ、以前にもまして親近感を覚えた。

7月30日(日)フリーデー

7月31日(月)ビントゥアン省ファンティエット、ホアビン、タインリイを訪問

朝6時半にホテルを出発し、ビントゥアン省に向かう。10時45分、ファンティエットの司教館に到着。長年協力関係にあるホアン司教からお話を聞いた。「ベトナム政府は、規制をゆるめつつあり、学校、会社、病院の私営を認めている。経済をホーチミン市に集中させないで、地方に分散させる政策をとってきている。今までは、地方の若者は専門の勉強をするのに、ホーチミン市に行かなければならなかった。将来はこの省に専門学校を創り、ここで勉強しそのあともここで働けるよう会社も考えたい」彼は現在、牛飼育、豚銀行プロジェクト、薬草園および漢方薬剤師の養成などに取り組み、薬草工場も作った。「豚銀行は農村の女性を助け、家族関係もよくなる。牛銀行や食肉加工場も計画している」カトリックの司教さんだが、構想もさることながらその実業手腕には驚かされる。

午後、ファンティエットから車で1時間程離れたホアビン教会に向かった。ここでは教会の敷地内にある教室で、学校に行けない子どもに勉強を教えるため、椅子と机を支援してほしいと話された。年齢を過ぎたため、公立の学校に行けない子供がいて、100人位の子どもを3つのクラスに分けて教えたいという。どこを訪問しても、学校に行けない子どもの話をよく聞き、本当にこんなに沢山の子どもが学校に行けていないのかと思ってしまう。

2時半にホアビンを出発し、さらに車で1時間程離れたタインリイに着いた。午前中にホアン司教に話を聞いた養豚プロジェクト、薬草園を見学し、より詳しく具体的な説明を受けた。ここで夕食をご馳走になり、すっかり暗くなった中を、近くのホテルに向かった。

8月1日(火)ビントゥアン省タンタオ、チンタムを訪問 ホーチミン市へ戻る

朝6時半にホテルを出発、車で30分離れたタンタオの教会を訪問し、朝食をご馳走になった。ここは1992年から関係が継続している古い支援先で、住民委員会がしっかりしていて、牛銀行がうまく軌道に乗りモデルケースともいえる地域だ。委員会が地域の全体の状況に目配りしているのに、感心させられる。

8時半、タンタオを出発、チンタムに向かう。9時45分、チンタム教会着。ここは新経済地区と少数民族が隣り合わせて住んでいる地域で、タンタオに学びながら、少数民族に牛銀行を行っている。毎年10頭位ずつ支援し、今年で3年目になる。牛をもらった人達が、原っぱに牛を連れて私たちを待っていた。今年は餌の草も豊富で大丈夫と話していた。午後1時25分、チンタム発、ホーチミン市へ帰路につく。

8月2日(水)ソックチャン省ダイハイ、バックハイを訪問

朝6時、ホテルを出発し、メコンデルタのソックチャン省に向かう。8時半、ミーターのレストランで朝食をとる。9時40分メコン川の前江に架けられた橋を渡りピンロン市に入る。ここからカントー市まで33キロである。10時半、メコン川後江のフェリー乗り場に到着。今回はほとんど待たずにフェリーに乗れた。フェリーに乗るとすぐ車から降り、海のように広く、赤茶色の水をたたえたメコン川を眺めた。15分ぐらいで対岸に着くと、そこはもうカントー市だ。車はさらに走りカントー市を通り抜け、11時50分に

目的のダイハイ教会に到着した。早速今年の支援でつくられた米の乾燥場を見る。その後、次回の支援で作りたいという橋の場所を見に行った。バイクの幅ぐらいしかない細いでこぼこ道を、バイクが転倒しないかと冷や冷やしなが20分ぐらい走り橋の予定地に着いた。

昼食後、ダイハイ教会からバイクに分乗し、川沿いの車も通れない細い道を約30分走り、バックハイ教会を初めて訪問した。すでに申請書を受け取っていたが、まずは現地を訪れ責任者のバン神父に会って直接話を聞く。ここは政府から鍼開拓地として認定された地域で、いろいろな地方から集まってきた人が暮らしている。カンボジア人、チャム人、華人も多く、宗教や習慣もそれぞれ違う。彼は人々に食糧を配給したり給食サービスを行っている。写真を見せてもらったが、老人や障害者がとても多かった。いろいろな問題を抱えた場所が、まだまだ沢山あるんだと改めて感じた。3時35分にダイハイ教会を出発し、4時45分カントー市着。カントー泊。

8月3日(木)カントーからホーチミン市へ 午後タオダンを訪問、子どもたちと船遊び
朝6時30分に朝食をとり、7時15分カントーを出発。車は一路、ホーチミン市へ。

午後1時半、ストリートチルドレンをケアするグループ、タオダンの一時滞在施設兼事務所を訪問し、スタッフと話し合いを持った。ストリートチルドレンの数は減ってきているが、地方から出てくる貧しい人の数は増えているという。家族と一緒に来ているケースはまだいいが、仲介者に連れてこられた子どもは危険が多いという。2時半、サイゴン川の船着き場に向かう。50人ぐらいの子ども達とスタッフ、私たち訪問者が船2艘に分乗し、サイゴン川をクルーズした。子ども達は元気だったが、前回よりおとなしい感じがした。4時30分解散。

8月4日(金)ホーチミン市から飛行機でハノイへ

9時にホテルを出発し、タンソンニャット空港に向かう。9時半空港着。11時30分発の飛行機でハノイに向かう。

ホーチミン市やハノイでは、オシャレな服に身を包んだ若者が、携帯電話を持ち歩き、大勢の外国人観光客でにぎわっている。そこから車で2~3時間離れた村では、学校に行けない子どもが大勢おり、裸足で牛の世話をしている。ベトナムでも、日本でも、すべての子どもが希望を持てる社会に向けて努力することは、大人の役割だと痛感する。

ツアー後半(カオバン省、ゲアン省訪問)については、紙面の都合により割愛する。